

【エッセイ部門・PHP エッセイ賞】

味噌汁

慶応義塾湘南藤沢高等部 第1学年 村下 誠人

僕は朝、味噌汁から手を付ける。365日、どんな朝がきても変わらないことだ。

朝ご飯はいつも、ひいおじいちゃんが作ってくれていた。メニューは毎日変わらず、ご飯、味噌汁、魚、野菜だった。ひいおじいちゃんは、料理が得意というわけでもなかった。だけど、ひいおじいちゃんの作る朝ご飯は世界一だと今でも思う。僕は中でも、味噌汁が大好きだった。サイズも形もいびつな豆腐が大好きだった。日によって硬さが違うジャガイモも大好きだった。飲むと心まで温まる、そんな気がした。

「いただきます。」

その合図とともに、味噌汁を世界一の幸せ者のような笑顔で飲んでいて。なにより、僕のそんな顔を眺める、ひいおじいちゃんの満足そうなしわくちやな笑顔が大好きだった。

家族みんなで小さなちゃぶ台に輪になって賑やかに食べていた。笑顔が絶えることなんてなかった。僕はこんな朝ご飯の時間が、一番好きで、幸せでいっぱいだった。

だけど、その日は突然訪れた。

「ひいおじいちゃん、天国へ行ったよ。」小学校から帰ってきた僕に、母さんは一言そう言った。

「そっか。」

僕は一言そう言って、自分の部屋のベッドに飛び込んだ。僕はなぜか泣けなかった。母さんが言った言葉の意味が分からなかったわけではない。部屋の外からは、リビングの微かな光とともに家族の泣いている声が聞こえてきた。部屋にそっと入ってきた犬のミッシェルでさえ、きょとんと悲しい目をしていて。それでも僕は泣けなかった。悲しいという感情さえ湧かなかったのかもしれない。

そこから時間が過ぎるのは早かった。お通夜に葬式と慌ただしく行事が進んでいった。多くの親戚の人と会った。皆、涙ぐみながら線香をあげていった。僕の心は何かポカンと開いて、ただぼーっと一定のテンポを打ち続ける木魚の音を聞いていることしかできなかった。

葬式も終わり、やっと、家族全員で食卓を囲って食べる朝ご飯が戻ってきた。その日の朝ご飯は、おばあちゃんがいつものメニューを作ってくれた。

「いただきます。」

僕はいつもと変わらず、味噌汁から飲み始めた。舌が少し触れただけで分かった。味がほんの少しだけ濃かった。家族の誰も気が付かないほどの違いだったと思う。しかし、僕にとっては深く鮮明な違いだった。

ポトッ。涙が一滴パジャマに落ちた。

「え、？」

僕は泣いていた。何度目をこすっても、涙を止めようとしても、ますます目から溢れ出るばかりだった。涙の止め方を忘れてしまったかのようにだった。僕は、この時やっと気が付いた。ひいおじいちゃんのあの味噌汁がもう飲めないこと、しわくちゃんあの優しい笑顔が見られないこと、そして、もう会えないことに。

あの時流した涙は悔し涙だったのかもしれない。ひいおじいちゃんともっと遊びたかった、お話ししたかった、そして、ありがとう、大好きって伝えたかった。伝えればよかった。失って初めて気が付く多くのものが、小学生の僕の小さな心の中にジーンと響いて溢れ出していた。

家族は僕に何か声をかけていた。だけど、早朝の霧のように霞んで聞こえなかった。僕はただ淡々と味噌汁を飲んでいて。少ししょっぱかった。

この日から、僕は少し大人になった。大切な人が、いついなくなるかわからない。今日という日はもう来ない。だからこそ、「伝えたい言葉は必ず、伝えたい人に直接言う。」「そして、笑顔。」ということ胸に止めて生活すると決めた。今でも守れていると思う。

中二の春休みだっただろうか。よく覚えていないが、暇だったので、自分の小学生の頃のおもちゃ箱を整理しようと、懐かしいフィギアを棚から取り出していた。すると一番下の棚から、一通の手紙を見つけた。表には大きく達筆な字で「まことへ」と僕の名前が書かれていた。送り主を見る必要はなかった。ひいおじいちゃんの字だと一目でわかった。手紙を開けると一言、「心が立派な大人になりなさい」。

ひいおじいちゃん、僕はそんな大人になれていますか？

「いただきます！」

そして今日も、味噌汁に手を伸ばす。